平成二十九年二月の收穫より（坤）

土屋　博

一「偉人日記」長田偶得著

（成功雜誌社、明治四十三年刊、定價金六十錢）二二六頁

古書價格千五百圓也。信長、松陰、芭蕉、山陽母、象山、高山彦九郎、海舟、山陽、横井小楠、木戸孝允らの日記を收錄す。

たとへば、佐久間象山元治元年六月廿一日の日記より、「晴　暑氣九十有度。午前、中川王より御催促あり。午後騎して參殿す。御對話あり。且近日関關白殿下に參るべしとの御沙汰あり。席上、御菓子拜領す。右は今上より當殿へ參り候品也。實に難有事なれば、歸後、從者共に頒ち遣はす。」と。當時の光景眼前に浮ぶが如し。

二「大久保利通」松原到遠編

復刻版（文化印刷、昭和五十五年刊）二五六頁＋補遺六九頁、函入二冊

（原著は、新潮社、明治四十五年刊、定價金五拾錢）

古書價格六千圓也。報知新聞に連載せられたる「大久保公」を一卷となせるものなり。

伯爵大隈重信、序に曰く、「予は故伊藤公と共に常時親しく彼の抱負を聞き、その畫策する所を助けたりき」と。本文は、維新前の公、維新後の公、大久保公雜話、大久保公論より成る。たとへば、少年時代の樣子、妹たち三人により語らる。鄕中にては志氣の鼓舞、武術の鍛錬を目的としたれば、皆にて讀む本は武勇義烈に關したるもののみ。十二月十四日赤穗義士討入りの晩には「義臣傳」を徹夜して讀み、曽我兄弟討入りの夜には曽我兄弟の物語を讀みたる由。

三「日本精英　上下」幸田成行編

（聚精社、大正二年刊、正價金五圓）一五九四頁

古書價格合計千圓也。稀に見る掘出物。露伴學人の序より、「人間の精英俊偉の我に於けるの恩澤を思はずんばあらざる也。草榮え、草枯る、歳ただ是の如きのみと謂はんや、人生じ、人死す、世またただ是の如きのみと謂はんや」と。凡例より、「本編題して日本精英といふ。日本人物の精英を取りて、其の面目風　を傳へ、其の事業精神を記し、或は其の片影を寫し、或は其の瑣談を錄するを以てなり」と。

たとへば、聖德太子につきては、「蝦夷綾糟」、「佛法興隆」、「十七條憲法」、「片岡山の聖」收錄せらる。紫式部につきては、「七事共具」（安藤爲章）掲載せらる。「一、父は菅三品の弟子、二、聰明自ら神童なりけらし、三、箏の傳授にてもその樂才推し量るべし、四、恆例、一年の公事、優美なる事の限りに其の眼肥えたり、五、文質かねたる世に生れたり、六、玉蔓の卷に常陸の事を書けるは外祖或は母の物語など聞きたるにや、七、女にても上の品なる人は下ざまの業を知り給はず、まして下のきざみは如何上を思ひ及ばむや、式部たまたま中の品に生れて思ひ至らぬ隈なし。」と。

人物事典としての價値甚だ高しと覺ゆ。

四「譯註文章軌範」謝疊山編、山田鶴川譯

（岡村書店、大正七年十一版、定價金八拾五錢）三一四頁

古書價格三百圓也。初版は明治四十五年。序に曰く、「文章軌範が漢學の上に如何に重要なる地位を占むるやは、明治以前に在って此書が邦人必讀の書とせられたるに見て明らか也。當時の人は此書を漢學の入門とし、此書に依りて作文の力を養へり」と。今は亡き岡崎久彦先生の諳んじ居られし諸葛孔明の「出師の表」も本書に掲載せらる。

五「講話文範　現代手紙往來」桑田春風著

（岡村書店、大正十二年刊、定價金貳圓七拾錢）一〇四四頁

古書價格三百圓也。天金、函入。講話篇中「名家手紙の話」に德富蘇峰の「手紙は如何に書くべきか」あり。第一、簡潔。第二、明快。第三、精確。加ふるに「必ず讀み返せ」。「一讀再讀は勿論、事情が許すならば、前夜認めたるものは翌朝まで留め置いて、更に熟覽の上、發送するが宜し」と。

六「書簡點描　偉人天才を語る」小笠原長生著

（實業之日本社、昭和八年刊、定價壹圓五拾錢）三六六頁

古書價格三百圓也。著者は海軍中將、子爵。はしがきより、「私は青年時代より目欲い手紙は大概保存して置いたため、今では夫れが餘程の數に上り、時々繰廣げて見ると、云ふ可からざる感興を覺えるので、遂に其の中より、將軍、政治家、宗教家、學者、文士、藝術家、俳優、力士等の寄せられた最も興趣に富んだもの二十餘通を選出し、それに直接なり間接なりの物語を添へたのが本書」とあり。たとへば、元帥東郷平八郎伯よりの書簡は以下の通り。「拝啓　御申越之小生傳記編纂之件は　貴下に限り承諾仕り候も　刊行の儀は　今暫く之間御猶豫被下度候也　悤々不一」（大正二年四月二十八日附）。傳記の稿成るは其の八年後のことなりき。

七「日本百人一詩」土屋竹雨著

（砂子屋書房、昭和十八年刊、定價二圓五拾錢＋特別行爲稅相當額十五錢）四〇五頁

古書價格百圓也。表紙繪横山大觀。序には「七言絶句の一體に限り、平安朝より明治末葉までの作家を含み、立意正しく、格調整ひ、日本精神の遺憾なく發露せるものにして、而も難解の嫌なく人心に入り易きものを採った」とあり。菅原道眞の九月十日（去年今夜侍清涼）より乃木希典の金州城下作（山川草木轉荒涼）まで、本文、作者・題義、摘解、大意、餘論掲載せらる。

八「新釋　日本名家絶句抄」紀本縄著

（照林堂書店、昭和十八年刊、定價二圓＋特別行爲稅相當額八錢）二四七頁

古書價格千圓也。自序より、「余は詩に依りて性情を高傑にし思念を錬成するの適當なるを信ず」と。春部門は、四人の作者（賴杏坪、河野鐵兜、藤井竹外、菅茶山）による「遊芳野」に始まる。

（平成二十九年五月八日受附）